

ひだかがわしつとのうろこ

日高川嫉妬鱗

あま だ つつみ 天田堤より
わた ぼ だん 渡し場の段
どうじょう じ だん 道成寺の段

淡路座が残した床本を基に淡路独自の演目『日高川嫉妬鱗』を復活。
大阪では明治中期以降見られなくなった場面を含む上演！



平成27年度文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」(芸術文化振興費補助金)

淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演

日時：平成27年12月19日(土)

開演15:00 (開場14:30)

場所：淡路人形座

◆講演「人形浄瑠璃における道成寺物の上演史」

久堀裕朗 大阪市立大学准教授

◆淡路人形座・復活上演

ひだかがわしつとのうろこ

「日高川嫉妬鱗 天田堤より渡し場の段・道成寺の段」

主催 公益財団法人淡路人形協会

淡路人形座復活公演と人形芝居の復興

公益財団法人淡路人形協会理事長 正井良徳

淡路人形座は昨年50周年を迎え、51年目の今年には新館に移転して3年となりました。日頃みなさま方にお支えいただいたお陰と心よりお礼申し上げます。

かつて淡路島の伝統芸能として楽しんでいた淡路人形の上演を、地元の方々にこそご覧いただきたいと座員たちは淡路人形独自の演目や演出の復活公演を始めました。文化庁や兵庫県、南あわじ市、公益財団法人淡路人形協会、淡路人形座だけでなく、文化庁の事業を実行する検討委員の先生方、講師の先生方、淡路人形芝居サポートクラブ、淡路人形座応援団など、大勢のご協力を得て、今日の復活公演ができることに感謝致しております。淡路人形座の座員たちは、通常の公演や国内外への出張公演や出張講座、部活指導など多岐にわたる活動で忙しい中、毎年の復活公演をこなし、次第に力をつけてきました。

人形浄瑠璃の文化は今も確実に日本人の中に生きていると思います。特に全国を興行し、三人遣いの人形浄瑠璃を全国各地に伝えた淡路では、だんじり歌も盛んです。江戸時代は浄瑠璃本がベストセラーで、日本人の世界観や人生観、歴史観に影響を与えてきたそうです。私が子供の頃には、身近な人が語る浄瑠璃を何度も聞いていたうちに自然と覚え、口ずさめるようになる程に淡路のあちこちに素人の義太夫の名人がいました。地域の文化力の象徴のような淡路人形浄瑠璃の魅力をこれまで以上に発揮できるのが今日の上演だと思えます。

「日高川嫉妬鱗」は、これまでの淡路人形座の上演とは違い、清姫が天田堤を通って道成寺まで辿り着くまでとなっております。大阪市立大学の久堀裕朗先生が淡路人形の床本を発見され、淡路独自の浄瑠璃として今日発表できるまでに御指導くださり、人形や衣装製作にもご協力を頂きました。上演記録と床本だけが、音源も映像もない演目でしたので、淡路人形座の座員が浄瑠璃の作曲と補曲をし、演出も工夫しまし

た。友路師匠や友喜美師匠、文化庁の事業の先生方のご指導のお陰で、若手座員たちも力をつけています。彼らは淡路の文化を全国各地、世界各国に運んで行く人材です。今後の活動が期待され、ほんとうに楽しみであります。今日お集まり下さった皆様方には、心からの感謝を捧げ、今後益々の御声援、御支援をお願い申し上げます。

人形浄瑠璃における道成寺物の上演史

大阪市立大学大学院文学研究科准教授 久堀裕朗

紀州道成寺の鐘にまつわる安珍・清姫の伝説は、能の『道成寺』をはじめ、様々な芸能の題材となっている。人形浄瑠璃でも、寛保二年（二七四二）大坂豊竹座初演『道成寺現在蛇鱗』（浅田一鳥・並木宗輔合作）や、宝暦九年（一七五九）大坂竹本座初演『日高川入相花王』（竹田小出雲・近松半二ら合作）などの作品が生まれたが、現在しばしば上演されている「渡し場の段」は原作『日高川入相花王』に基づくものではなく、『道成寺現在蛇鱗』四段目中「清姫日高川之段」の改作である。

『道成寺現在蛇鱗』は、初演後ほとんど再演されなかったが、この「清姫日高川之段」は、前半（清姫と通行人のやりとり）がいわゆるチャリ場（滑稽味の強い場面）であるため、大坂の絵師として著名な耳鳥齋（素人浄瑠璃でも名高く、チャリを得意とする）によつて復活されたらしく、天明六年（二七八六）冬序『素人浄瑠璃評判記』の「松へ」（耳鳥齋）の評に「世間にひろまりし現在鱗・わらひ茸、皆此人の作。フシ付、新上りの一番もこしらへる人は当時素人にござりません」とあり、また天明元年（一七八一）刊の浄瑠璃評判記『闇の磔』『豊竹源太夫』の評に「黒人より素人受の現在鱗」の記述が見える。おそらくこの耳鳥齋による素浄瑠璃が基になって、後年この段が人形付きで上演されるようになったのだろう。上演記録を辿ると、十九世紀に入ってから明治の初め頃まで、「日高川入相花王」「日高川現在鱗」等の外題で上演された記録が散見されるが、それらはこの「清姫日高川之段」を中心に、時に「真

那古庄司館の段」「日高川入相花王」や、増補の「道成寺の段」を加えた構成での上演と推定される（大坂での『日高川入相花王』通し上演は、文政四年九月が最後）。但しその形で今日まで伝えられたわけではなく、昭和以降の文楽では、この「清姫日高川之段」についても、前半のチャリ場（天田堤）をカットして更に改訂を加えた内容の「渡し場の段」（外題を「日高川入相花王」「道成寺入相花王」とする）が定着するに至っており、これが現在、人形二体（清姫と船頭のみ）で上演可能な演目として、地方でも盛んに上演されている。

一方、淡路の人形座では、『日高川入相花王』を近代に至るまで「通し」の形で伝承し、渡し場の場面だけは、大坂と同様に「清姫日高川之段」を取り入れて上演していた。その際の外題は、文久元年（一八六一）七月市村六之丞座興行番付や淡路源之丞座の小冊子『浄瑠璃並二芝居楽譜脚本』（明治二十九年）では「日高川入相花王（桜）」とあるが、現存する明治期の淡路源之丞座床本（兵庫県立歴史博物館蔵）や吉田伝次郎座床本（松茂町人形浄瑠璃芝居資料館蔵）では、多く「日高川嫉妬鱗」と書かれており、近代になってからこの外題で上演が繰り返されていたことがわかる。これらの床本には、上演記録の書き込みなども見られ、少なくとも明治後半まで淡路座においてこの『日高川嫉妬鱗』が通し上演されていたことは確実である。その後、おそらく昭和以降、本作はほとんど上演されなくなり、残念ながら伝承が途絶えるに至ったと推測される。

以上、人形浄瑠璃における道成寺物の上演史を概観したが、こうした歴史を踏まえ、今回の淡路人形座復活公演では、大坂とは異なる伝承を有するこの『日高川嫉妬鱗』を取り上げ、「天田堤から渡し場の段」（原作は『道成寺現在蛇鱗』）と、それに続く「道成寺の段」（原作は『日高川入相花王』）を復活して上演することになった。いずれの段も現在の文楽では観ることのできないもの（前述のように「渡し場」も現行文楽とは詞章が異なる）であり、本公演は淡路独自の伝承を確認する貴重な機会となるだろう。

「淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演」復活演目一覧

- | | | |
|---------|-----------|-------------|
| 平成二十一年度 | 『玉藻前職袂』 | 神泉苑の段 |
| | 『賤ヶ嶽七本槍』 | 勝久出陣の段 |
| 平成二十二年度 | 『仮名手本忠臣蔵』 | 二つ玉の段（早替り） |
| | 『奥州秀衡有誓塔』 | 鞍馬山の段 |
| 平成二十三年度 | 『賤ヶ嶽七本槍』 | 清光尼庵室の段 |
| 平成二十四年度 | 『生写朝顔日記』 | 摩耶ヶ嶽の段 |
| 平成二十五年度 | 『仮名手本忠臣蔵』 | 殿中刃傷の段 |
| 平成二十六年 | 『奥州秀衡有誓塔』 | 遠目鏡の段（素浄瑠璃） |
| | 『妹背山婦女庭訓』 | 入鹿御殿の段（早替り） |



平成26年度復活公演「妹背山婦女庭訓」入鹿御殿の段より

『日高川嫉妬鱗』

天田堤より渡し場の段
道成寺の段

【復活上演台本・復曲について】

今回復活する『日高川嫉妬鱗』「天田堤より渡し場の段」「道成寺の段」の上演台本は、明治期に書写された淡路源之丞座旧蔵床本（兵庫県立歴史博物館蔵）と吉田伝次郎座旧蔵床本（松茂町人形浄瑠璃芝居資料館蔵）を土台にして作成したものである。

但し、「天田堤より渡し場の段」は、淡路座の床本と大坂で伝承された「日高川現在鱗（増補現在鱗）渡し場の段」（すなわち「道成寺現在蛇鱗」「清姫日高川之段」）に大きな違いがないことから、大阪市立中央図書館所蔵の旧人形浄瑠璃因協会寄託本（綱造・弥太夫・吉兵衛遺文庫）を参照し、一部そちらの詞章を利用したところがある。また意味が不明確になっているところなど、原作『道成寺現在蛇鱗』『清姫日高川之段』を参照して訂正を加えた。

一方「道成寺の段」は上記床本をもとに、原作『日高川入相花王』を参照し、一部修正を加えて上演台本を作成した。ただ、寺僧二人のやりとりの部分（原作と異なる増補）だけは、淡路座の床本そのままでは今日の観客に理解されにくいところがあるので、旧因協会寄託本（原作と全く異なる「道成寺鐘供養の段」）を参考に、併せて歌舞伎台帳のせりふなども利用して台本を作成した。また今回

の台本では、清姫が鐘を巻く場面以降はカットしてまとめている。本来はもちろんこの続きがあるが、通し上演ではない（「天田堤より渡し場」に至るまでの段を上演しない）今回の上演では、これ以降の結末部分のみ上演しても、話の内容がわからず、あまり意味がないからである。

以上、今回の上演に当たって、特定の一本に拠らず複数の浄瑠璃本を参照し、上演台本を作成したことを断っておく。なお、以下に掲載する床本の表記は、基本的に参照した浄瑠璃本の表記に拠っているが、読みやすさを考えて適宜手を加えた。但し、全体の仮名遣いは統一していない。

次に、復曲についてであるが、残念ながら淡路座の朱（三味線譜）入り本は残っていないので、まず「天田堤より渡し場の段」は、主に上記の旧因協会寄託本の朱を参考に補曲した（担当・鶴澤友吉）。また「道成寺の段」は、大坂でも上演されてこなかった（大坂で上演された「道成寺の段」は原作『日高川入相花王』とは異なる内容）ので、大坂の演者による朱も残っていない。そこで、原作『日高川入相花王』丸本の節章をもとに、今回新たに作曲した（担当・鶴澤友吉）。

【あらすじ】

天田堤より渡し場の段

皇位継承をめぐる争いから命を狙われる身となった桜木親王は、身をやつして山伏安珍となっていたが、紀州真那古庄司の館で恋人のおだ巻姫

と再会し、二人で庄司の館を出て、道成寺に逃れる。高位の人とは知らずに安珍を慕っていた庄司の娘清姫は、そのあとを追う。清姫は天田堤で道行く人々（里人・飛脚・七墓廻り）に安珍らの行方を問いつながら、やがて日高川の渡し場に辿りつく。しかし、安珍に頼まれていた船頭は、清姫を向こう岸へ渡すことを拒否する。嫉妬に狂った清姫は、髪を振り乱し、ついに大蛇の姿に変化して川を渡ってゆく。

道成寺の段

道成寺に辿り着いた清姫は元の姿に戻り、寺に入ろうとする。しかし寺は鐘の供養のために女人禁制となっており、門番をする寺僧に止められる。しかし清姫は寺僧をうまく騙して寺の中に入り込むと、再び恐ろしい大蛇の姿となって、安珍とおだ巻姫が隠れた釣鐘に巻き付く。

【床本】

天田堤より渡し場の段

へ行く空の。

道もあやなき。恋路の閑安珍立ち退き給ふと聞き。はつと驚く清姫が。胸も張りさく瞋恚の炎。これがれこがる。我が思ひ。心強くも偽つて。捨て行く夫のつらにくやいづく迄も追つかけて。恨みを言はでおかふかと寝所を忍び立ち出づる。姿しどなき。振袖の。裏吹きかへす夜嵐も。身に

しむ野辺の露深き。草踏み分けて只独り呼べど叫べど其人の。影も形も。鳴く虫の声も恨めしちりりんく。きりくすは我恋を思ひきれとの辻占かうるさやいや聞き捨てて走りつまづく小石原。小笹萱原うち過ぎて。あまた堤にさしかゝれば。

向こふへちよこく小提灯。さびた男の急ぎ足。間近くなれば。声をかけ。「コレ申しちよつと物を問ひませふ。甘ばかりの山伏姿。器量のよいのが先へ行かずや。お逢なされはせなんだかへ。」ヲ、逢ふた共く。それは余程跡の事。宵闇で道筋が知れにくい。道成寺へはかふ行くかと。問はれた顔つきよろしくきよろしく。それを尋ねるこなたのそぶり。エ、聞こへた。コリヤ色じやのく。若い時には連れてくれにや。首くつて死ぬるの。池へ飛び込んで死ぬるの生きるのと言ふけれど。死んで未来で添はれるやら。添はれぬやら。どふやらかふやら便宜がない。殊にかの山伏殿には。「たんと道が遅れたかへ。」「おくれた段か。なんぼせいても女子の足。追いつく間にや夜が明ける。悪い事は言はぬ。早ふうちへいんだがよかる。いなふやれ。我がふるさとへ帰ろやれ。我等も宿へ帰らん」と。足もしどろに行き過ぎる。

「ハアおくれたり口惜しや。いで追つかん」と氣をいらち。小づま引上げかけ出す向こふへ。エイくくサツくくエイくくサツくく。伏箱かたげた早飛脚。行き当たつて「あいたし。アいたし。鼻柱がくわんと言ふたがな。コレ目を明いて通りやいの」と行かんとすれば。

「コレく待つて」と引とゞめ。「ちと尋ねたい事が有る。甘ばかりな山伏の」ヲツト皆迄聞くに及

ばぬ。たつた今逢ふたが。その山伏の咄しには「何と言ふたへ」ヲ、鼻柱がくはんと言ふたがな「ハテじやらくとてんがふ言はずと有様に言ふて下さんせ。」ハ、そんなら貴様の事で有らふ。後から十五六な娘が来るであらふ。必ず言ふてくれなと頼みやつての。「サアその後は」イヤそれ言ふているひまはない「なふても有つても問はにやならぬ。訊聞いて追つ付きたい。サアくちやつと行きたいはいの」「イヤそつちよりこつちが行きたい。急用じやそこのいた」「イヤ聞かねば通さぬく」「こりやマア情けない事に出会ふた物じやなア。そんなら言ふて聞かそ。マア斯じやはく。貴様あんまり助兵衛じやによつて。姫の手を引て夜抜けするくと言ふたわいのふ」「そふしてどふじやへ」「エ、情けない。まだかいな。サアく是から三段目じや。ソレ大きな声では言はれぬ事じや。マアくこつちへお出でく。エ、うまい腰付じやなア。年はいくつじやへ。十五六か。もふよい男がたんと有るじや有らふのふ」「知らぬはいのふ」「しらぬによつて言ふて聞かすのじや。サ、サ、耳持つてお出で。よいかく」「もうちと大きな声で言ふて下さんせ。一つも聞こへぬわいのふ」「エ、聞こへぬ筈じや。まだ言はんのじやがな。今度はほんまじや。ま一遍お耳お貸しく。耳つとふ」びつくりする間にすり抜けて。飛ぶがごとくに急ぎ行く。

「扱は我を出しぬいておだまき姫に添はん為。逃げ隠るゝとはきたなしにくし。命限り根限り。追っかけ追つつめ。今に思ひ知らせん」とならはぬ道もいとなく。踏みしめく行く先に。

鉦打ならしひよつこく。無縁法界七墓を毎夜さ廻る修行者が。行違ひさま「コレ申し」「南無阿弥陀くく。ア、案の程に出た程にく。ア、幽霊様く消え給へくく」「イヤ大事な物じやはいな」「アイヤくそつちは大事のふてもこつちに大事が有る。コレ幽霊と言ふものは。白いべ、着て出る物じやが。見ればびらしやらと。その様な色よいべ、着ては。コレ極楽の道もしるまい。お念仏でやつてこませ。南無阿弥陀くく」「ア、コレくそんなものじやないわいのふ。私は先へいた人に追つ付かねばならぬ者。どこぞで逢はしやんしたか。それが聞きたい。サアちやつとく」「そんなら幽霊じやないじや迄。ドレくちよつとすかして見よう。ホ、ホ、ほんに人間じや。しかも美しいものじやな。ハ、アそれで読めた。そんならお前の事じやある。後から十五六の姫が来る程に。必ず知らぬと言ふてくれと言ふたわいのふ。坊主じやによつて未来が恐ろしい故。真直に言ふぞや。」「エ、それはマア」「ア、コレく其様な恐い顔しても。おりやもふ何にも知らぬ。南無阿弥陀くく」と唱へさし。行きがたしらず成にけり。

「ノウそれはマアほんかいのふ。エ、腹立ちや胸ぐるしや。それ程いやな自らを。女房に持たふとなぜ言ふた。男傾城人でなし。エ、恨めしや妬ましや」と怒るかんばせ朱をそぐ。色も嫉妬に迷ひの煙くらむ眼に涙の雨。ばらくばつと。裾を蹴はらし砂を飛ばし。かけ行く道も心から。はてしも浪の音すごき。日高の川の渡し場に潮へたどり着きにけり。

はぎも露わに清姫が。嬉しや此川越へ行けば道成寺へは一足と。声をはかりに。「ナフ／＼その船渡してたべ。早ふ／＼」と呼ばれば。

寝耳にびつくり舟長が目をすりこする仏頂面。「ア、何じやく。夜夜中やかましいはい。夜が明けてから来い。エ、あたぶのわるい」とつぶやきける。「イヤのふ夜明の事は扱置いて。一寸の間も待れぬ急用。道成寺迄早ふ行きたい。情けじやく渡して下さんせ」「何じやく夜明け迄待たれぬ。どうぞ汁吸いたい。ハア道成寺か。そんなら猶ならぬ。宵に山伏が頼んだ女。ならぬ／＼／＼」とぎしやばりける。「イヤノフそれは胴欲じやく。たとへ渡して下さつても。こなたの科にも難儀もかけまい。わしは行かねばこれが死。死ぬる命は惜しまねど。たつたひと言恨みが言ひたい。つらい悲しい身の上を不便と思ひその船に乗せて下されエ、渡してたべ。慈悲じやく情けじやく拝みます。拜むはいの」と手を合わせ。恨みつ泣いつ身をもだへ。前後不覚に泣きかこつ。「ア、やかましい。役にも立たぬよまい言。面白いこれが死か。おりや此年になる迄これが死といふ物を見たことがない。さらば見物しやう。しかし拍子がなふては死れまい。おれが爰からはやしてやろ。東西／＼。竹田近江が工夫のしかけ。これが死の始まり／＼。太鼓のかはりは尻こぶたじやく。テンテンピシヤピシヤピシヤ。扱この所であの娘がこれが死を仕ります。まずはこれよりこれがかけます。テンテンピシヤピシヤピシヤ。」喧嘩じかけと見へにける。

今はせんかた泣く目を払ひ。「ヲ、渡さぬとて爰まで来て。やみ／＼と帰らふか。恨みを言はで済ま

そふか。この水底に沈まば沈め。死なば死ね。念力通さで置くべきか。百尋千尋も何の物かは。渡つて見せん」と身縊ひ川へさんぶと飛込んだり。舟長びつくりわな／＼き声。「ア、恐ろしやく／＼鬼に成つた蛇に成つた。そりやもふ来るは。ヤレ上がるは。喰ひ殺されては成るまい」と舟を乗り捨てかけ上がり。堤の原を横切れに命から／＼逃げて行く。清姫は一筋に逆巻く水をかきわけ／＼。弓手に沈み馬手に浮き。抜き手を切つて渡りしは。すさまじかりける。

道成寺の段

へ次第なり。

されば日高道成寺は文武天皇の御願によつて。七堂伽藍橋の道成卿承はり。黄金にて鑄立てたる三國無双のこの鐘も。供養なければ苦むして。眠りを覚ます響きもなく。年月送る。春霞今日立ちのぼる釣鐘の。供養の庭ぞ殊勝なる。川を安々清姫が。入らんとせしが待てしばし。この姿ではよも入れじと。髪取り上げて取りなりも。寺の内には坊主ども。

○なんと頓経。今のこと聞いたか。お師匠様はい

かいたわけではないか。今日の鐘の供養に。女人禁制といふ事があるものか。なんとマア。時代なものじやくぞや。

△イヤモウ弁鉄。お師匠様も来世はろくなものには生まれまい。

○とは言ふものの。言い付けなれば番をせずばな

るまい。

△あのわろの仰せを背かれはせまい。

○どこの国にもあるにきまつてある。おなごを入

れなといふような。阿呆臭い事があるものかい。△コリヤ。何ぼう腹立て／＼も。言ひつけなればしよことがない。

○ハテ。何だかしらぬが。むせふによい匂ひがする様なわいの。

△イヤ。何にも匂ひはせぬぞや。

○アノ此匂ひが和僧の鼻には入らぬか。

△ドレ／＼おれが鼻へはとんと入らぬが。

○ハテめんよふな。此匂ひが鼻へ入らぬとは。果報拙きサア出家じやくな。

△ヲツト今鼻へ入つたぞ／＼。

△イヤモ心地よい。鼻を取ていきそふな匂ひじやくな。是はまあ何の匂ひで有ふのふ。

○サレバ是はたしかに赤貝を伽羅で煮しめた匂ひじやく。

△イヤ／＼赤貝ではない。是は蛤の煮だしじやく。しかもすべく／＼とした。よい蛤を煮だした匂ひじやく。

○イヤ此赤貝は。確かに白拍子じやく／＼。しかも山のいもを入れて貝焼きにする匂ひじやく。

△イヤ／＼違うた。忝くもこの此蛤は手入らずの生始じやく。しかも振袖の香りじやく。何と愚僧が嗅ぎ出したに違ひはあるまい。

○ハテ意固地な。白拍子も娘も。ついに見た事もあるまいに。

△イヤ人を侮つた事言ふまい。愚僧もこの身にな

らぬ先に。娘を抱いて寝た事がある。慮外ながらしかも手入らずを抱いて寝た。われこそ白拍子も娘も見た事もないに。サアそんなら娘か白拍子か賭にせう。

○面白い。なに賭にせう。

△現金がよい。そんなら和僧も愚僧も今朝庄屋の法事に行て。貰ふたお布施がある。是をかけたせふく。

○現金とは面白い。サアく出せく。もう一度言うて置かう。おりやいつまでも白拍子じゃぞよ。

△おりや娘も娘。しかも振袖じゃぞ。ソリヤ振袖じゃぞ。

○南無妙法蓮華経。

△オットお布施はこちらの物。

○エ、口惜しい。しかし女人禁制とあるによつて。

振袖は来ぬはずじゃが。

□いかに案内申し候ふ。

○案内とは白拍子にて渡り候か。

△娘にて渡り候や。

□これはこの国の傍らに住む白拍子にて候。

○そりや白拍子じゃ。

△南無妙法蓮華経。

○オットお布施はこちらの物。

△エ、口惜しい。折角してやつた物をたくられた。

さては。いよくそなたは白拍子に。

○△違ひないかや。

「これなるは此あたりに住む白拍子にて候。聞けばこの日高の寺に鐘の供養のある由。ちと拝ましてくださんせ」と。聞て弁鉄むつと顔。「女は俄の禁

制じゃ。ならぬならぬ。」扱はこの寺を頼み。我を入れなどの言いつけか。それ程にまで自らを』と恨みながらも空笑ひ。「ホ、ホ、ホ、女は只さへ罪深し。この結構な供養にあはねばならぬ訳がある。どふぞ入れて下さんせ」と。言へば頓経がとんきよ声。「ム、逢はねばならぬ。ならぬによつて猶ならぬ。若い娘のいとしばや。入れてくれとははづんだの。我々は太清僧。女犯肉食破戒の女。ならぬく」と一様に坊主囲ひや棒囲。つつぱり返つて居たりけり。

「コレ坊様。それ程大事の供養なら。拜もとは言ひますまい。この雪積つた気色どふもいへぬ。ちと来て御覧なされぬか」と。言へば二人は力身をやめ。扱々そさまはよい合点。通さぬ所を通らぬはコリヤ尤。サアく頓経。こいくとさばく出れば。

「アノ向こふなは何じやへ」「どれどこに」「あれくあちらに」「どれくどちらに」「あれ又あちらへ」「どれ又どちらへ」「アレたつた今門の外へ。ついと出たは何じやいなア。どれ見てこふ」と空走り。

「おいらも見て来」と一同に。門の外へとうるたへ走り。行く間待ちかね「忝い。嬉しや本望遂げたり」と奥の方へと

へ尋ね行く。

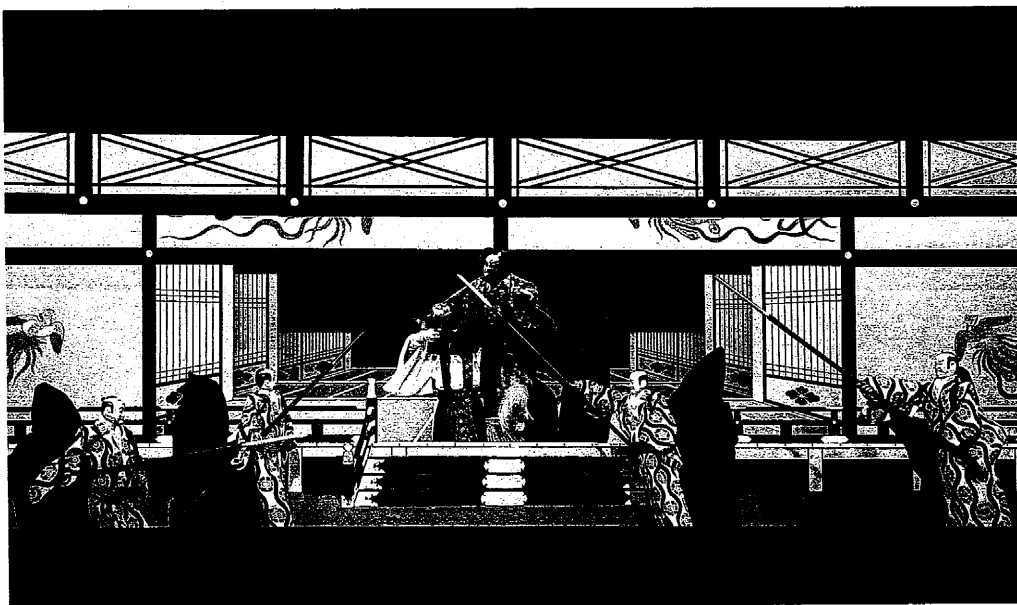
辺り見廻し清姫は。鐘のおりしにきつと目を付け。

「ムウ今日の供養におろした釣鐘。さては安珍様とおだまき姫。我をうとんでこの鐘の内に隠れ居るに極まつた。ヲ、たとへ鉄壁ばんじやくの内に隠るゝとも。あの鐘のけて女めを取殺さいで置こふか」と。もすそは自然と蛇形の尾先。頭は憤怒の鬼女にひとしく角を。ふり立て齒をならし。うる

こを逆立くるくく。寺中俄に震動し鐘楼の撞鐘鳴わたり。響渡れる有様は百千の雷も。一度におちくるごとくにてすさまじなんども。おろか也。

平成26年度復活演目

妹背山婦女庭訓 入鹿御殿の段より



役割

式三番叟

人形

翁 吉田 史興
千歳 吉田新九朗
三番叟 坂東千太郎

日高川嫉妬鱗

天田堤より渡し場の段

太夫

(補曲 鶴澤 友吉)

清姫 竹本友里希
里人 竹本 友庄
飛脚 竹本 友庄
七墓廻り 竹本 友庄
船頭 竹本 友庄
鶴澤 友吉
鶴澤 友弥

人形

清姫 吉田新九朗
里人 吉田廣の助
飛脚 吉田 徳蔵
七墓廻り 吉田 史興
船頭 吉田廣の助

道成寺の段

太夫

(作曲 鶴澤 友勇)

清姫 竹本友和嘉
頓経 竹本 友庄
弁鉄 竹本友里希
鶴澤 友勇
鶴澤 友弥

三味線
ツレ

人形

清姫 吉田新九朗
頓経 吉田 史興
弁鉄 吉田 徳蔵

〔淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演〕

15時 開演

ごあいさつ

正井 良徳

(公益財団法人淡路人形協会理事長)

式三番叟

淡路人形座

講演

人形浄瑠璃における道成寺物の上演史

久堀 裕朗

(大阪市立大学准教授)

口上

坂東千太郎

(淡路人形座支配人)

復活上演

『日高川嫉妬鱗』

天田堤より渡し場の段・道成寺の段

淡路人形座

淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演

『日高川嫉妬鱗』

天田堤より渡し場の段・道成寺の段

編集 淡路人形座

〒六五六〇五〇一

兵庫県南あわじ市福良甲一五二八―一 地先

電話 〇七九九―五二―〇二六〇

発行 公益財団法人淡路人形協会

〒六五六〇四七五

兵庫県南あわじ市市三條八八〇

(淡路人形浄瑠璃資料館内)

発行日 二〇一五(平成二七)年十二月十九日

執筆分担者(掲載順)

正井 良徳(公益財団法人淡路人形協会 理事長)

二頁上〜下五行目

久堀 裕朗(大阪市立大学准教授)

二頁下六行目〜七頁